

# ミュージアム通信

遊んで楽しい、  
見て楽しい、  
集めて楽しい  
泥めんこ

[かわら版]

企画展のご案内  
新商品のご案内

[連載]

第七回 未来の匠  
一次世代へ「技」を受け継ぐ人たち—  
九谷焼絵付師



「花の多ん日面売あきふど」(部分)・一雄斎国輝 画・国立国会図書館所蔵  
お面や泥めんこ、土人形などの玩具には、魔除けとして作られたものもある。

## 遊んで楽しい、見て楽しい、集めて楽しい泥めんこ

一度は遊んだことがあるでしようか…

昭和の時代に少年だった人ならば誰でもメンコで遊んだ思い出があるだろう(昭和の時代に少女だった方、平成生まれの方たちも半数くらいは遊んだことがあるだろうか)。

メンコといえば紙めんこ。厚紙で出来た丸形や角形をしている。そして表面には人気キャラクターのイラストや写真がプリントされているので、遊ぶだけでなく集める楽しみもある。

紙めんこが登場するのが明治三〇年頃。それまで明治時代は鉛製のめんこだったが、鉛害が問題となり、めんこは鉛から紙製<sup>\*</sup>に変わった。ではさらに遡って、鉛以前のめんこと言えば、素焼きの粘土でつくられた直径約一〜三cm、厚さ約1cmの「泥めんこ」と呼ばれているものであった。

## 「泥めんこ」で遊んでみよう

泥めんこの遊び方は「キズ」「よせ」「升入れ」「なめかた」「穴」「穴ぼん」など諸説ある。基本は地面に穴を掘るか、または図を描き、そこに投げ入れて、泥めんこを取り合う遊びである。残念ながら、紙めんこにある「起こし」という遊び方はない。

泥めんこの遊び方のルーツは、平安時代の貴族階級の間で流行した「意銭」にあると考えられている。これは当時の博打のひとつで、地面に穴を掘り、穴がけて銭を投げ、穴に入れば自分のものとして取り、穴の外の銭はその銭めがけて自分の銭を投げ、当れば勝ちとなるもの。大人の博打が子どもたちの間に広まることで、銭の代わりに土製のめんこになつたようだ。しかし博打色が強かったことは否めなく、天保年間（一八三〇）

一八四三には、子どもたちのあまりの熱中ぶりを見かねた幕府が禁令をたびたび出すほどだった。現代も、学校で男の子たちがゲームに熱中しすぎると、先生に取り上げられたり禁止されたりする。禁令が出て、ふて腐れている子どもがいたかもしれないと思うと、なんだか江戸時代も身近に感じられる。



江東橋二丁目遺跡から出土した泥めんこ(左上が「加藤清正」モチーフの泥めんこ)・墨田区教育委員会所蔵

## その数、およそ二千種類

泥めんこが子ども心をくすぐる理由は、遊べるということだけでなく、何といてもやはり、このデザインデザインの豊富さであろう。泥めんこの形態は、真円盤状のもの(面打めんうち)のほか、方形盤状、楕円盤状、楕円盤状でモチーフが浮き彫りになっているもの、人形焼しんがやきのような不整形のもの(芥子面かじこめ)などがある。また、泥めんこに描かれた図柄は実に多彩で、人や動物、文字、十二支、植物、火消しの纏まと、歳時・信仰、縁起物、流行、名所・風景、商品・広告、物語・伝承・諺、化物・妖怪、事物、家紋、幾何学文、連続文など二千種類はあるといわれている。これだけ種類があると、博打性だけでなく、収集欲までかき立てられてしまう。

## 泥めんこを見れば、江戸の暮らしぶりがわかる

では、現在でも根強いコレクターのいる泥めんこ

には、どんなモチーフが描かれているのか。

江戸市中で泥めんこが多量に出土した遺跡といえ、墨田区の江東橋二丁目遺跡が有名である。この遺跡は、七、八七四点の泥めんこと共に、土製品や土製型、泥めんこの型抜き生地などが出土しており、発掘調査によってこの地で土製品を生産していたことがわかった。本遺跡内で泥めんこを生産していたと比定される一九世紀中葉は、旗本の夏目左近將監が拝領していた時期に該当するが、旗本屋敷内に土製品の製作工房があったという事実が、なんとも興味深い。江戸時代後期には、旗本といえども内職をしなくては生計を立てられなかった武士の実態が浮かんできてくる。

本題に戻るが、泥めんこはわずか3cm程度の大きさの中に、江戸の生活に密接した意匠が多種多様に

描かれており、眺めているだけで飽きない。さらに詳しく観察していくと、それぞれの図柄は単に子ども受けだけを狙った図柄ではなく、泥めんに託した願いが見えてくる。

ただし、モチーフによっては子どもの玩具としての意味合いが強いものもある。特に、人物のモチーフの中には、力士や歌舞伎役者、戦国武将が多く描かれている。柏戸や玉垣、千田川、市川団十郎の紋、坂東亀蔵の紋、加藤清正などが多く、おそろく当時の子どもたちの人気者なのだろう。ヒーローや人気者がメンコやカード等に描かれ、それをつい集めてしまうというのは、時を経て変わることのない、人の心理なのかもしれない。

では、十二支や七福神、暦といった泥めんこはなぜ作られたのであろうか。

### 玩具に込めた祈り

江戸時代の子どもたちの遊びは、年中行事や当時の

流行した疱瘡などの病気の除けの信仰と結びついたものが多い。お正月に行われる羽根つき、独楽回し、鞠つき、毬杖などは鬼（病氣や悪事）を追い払うための呪術であった。

お面や土人形などの玩具には、疱瘡除け（疱瘡は死亡率の高い、子どもの流行り病であった）や親が子どもの無事生育を願う、心五穀豊穰などの信仰を意味するものがある。

同様に、十二支や七福神、暦などの泥めんこの意匠も、信仰や習俗を表していると思われる。

乳幼児生存率が今よりずっと低かった江戸時代の子どもたちは、いつも無事に丈夫に育つようにと願いが込められた玩具に囲まれて遊んでいたのだ。

※1 紙めんこが登場する前に板めんこもある。

※2 全身を赤く塗った人形や玩具は、疱瘡除けの人形といわれている。

## 「Designer-江戸デザインの巧・妙」

2012年10月6日(土)～11月25日(日)開催  
企画展観覧料500円  
てゆきます。

武家から町人まで、さまざまな階層が文化の担い手となった江戸時代。とくに、江戸時代中期に芽生え、後期を通して醸成されていった「粋」や「伊達」「張り」「洒落」などの江戸固有の感性は、町人が牽引した文化社会でこそ弾け、すぐれた創造力を発揮しました。たとえば装いの世界では、縞や格子柄に、茶や鼠・藍などの渋い色でまとめた着こなしが江戸モードとして確

てゆきます。

いま、我々が目にする江戸の作品は、褪せることのない魅力にあふれています。機智に富み遊び心あふれる意匠構成、柔軟で斬新な発想、卓越した描写力と色彩感覚、加えてそれらを形にする職人の技。そうしてつくりだされた数多のデザインは、江戸の巧妙洒脱な感性をあざやかに映し出します。

本展では、江戸時代後期から幕末期につくられた画譜や絵手本、染織・工芸品、版画・摺り物などを中心に、江戸デザインの豊かさや巧みさ、そして粋な色をご紹介します。技も感性もきわだって洗練されたこの時期ならではの粋のデザイン＆ワークをご覧ください。

【協力】其角堂コレクション

※観覧料と引き換えに、もれなく企画展限定リーフレットが付きます。



## 企画展のご案内

次世代へ「技」を受け継ぐ人たち

理節さん

九谷焼絵付師

藍一色で描く「染付」の絵付師、理節さん。彼女の手から生まれる美しい色、緻密な模様には、技だけではない優しい人柄が表れているよう。彼女の仕事とご本人の魅力に迫ります。

「小さい頃から絵を描くことが大好きで…」と楽しそうに語る理節さん。そのキャンバスに選んだのが九谷焼だった。

石川の中でも九谷の職人が集まる地に生まれ育ち、焼き物に絵を描くことに抵抗はなかったそうだ。

宮内庁の食器制作を請け負う妙泉陶房で、六年間の厳しい修行時代を送った後、独立。「初めは出来ないうことばかりで悔しかった」しかし、負けたくない、上手になりたいという思いが彼女の心を強くし、技術を向上させた。



ご自身でも大好きと語る「理節」の名前。名付け親は修行時代に厳しくも温かく見守ってくれた師匠の山本長左氏。「理」は自分へのこだわりや信念。「節」は節目を表す。時の節目で自分を見つめ直し、自分の信念に妥協せず仕事が出来ているか問うてみる。彼女の作品も名前に負けていない。

理節さんの作品に描かれる「染付」は、釉薬をかけるに焼いた素焼きの器に「呉須」と呼ばれるコバルトブルーの絵の具で描く絵付けの技法だ。数種類の粉状の絵の具を混合し、緑

茶を加えて擦り、独自の色を作り出す。細い線で骨書きをした後、だみ筆と呼ばれる太い筆に持ち替え、緻密な模様やモチーフを描いていく。絵の具をたつぶり含ませ、筆遣いの強弱を使い分けながら色の濃淡を表現する。素焼きの素地は水分を吸うので手早さが要求され、修正も難しい。いさゝきとした細い線を描くのは至難の技だが、理節さんは躊躇いなく筆を進め、細微で美しい世界を展開していく。いつも明るく元気な彼女だが、ひとたび筆を持つと真剣な眼差しへと変わる。

絵付けが完成すると、釉薬をかけて窯で本焼き。自分の思いと合致する作品に仕上がるか否か。窯から作品を出す瞬間が一番緊張するという。焼く前後では発色が異なる染付。常に完成図をイメージしな



がら描くのは相当な想像力が必要とされる。こうして完成した作品は、経験によって培われた、呉須の色に対する知識の集大成でもある。

絵付けを楽しみながら、常に前向きに仕事に取り組み理節さん。「デザインだけでなく、今までにない形状にもチャレンジしていきたい」と意欲的に語る彼女の今後の作品にますます期待が膨らむ。

二〇二三年一月十三日より、伊勢半本店、紅ミュージアムにて「紅と九谷焼若手作家による「技のコンプレクション企画」未来の匠展」美彩な九谷ワールドを開催致します。理節さんは現在、当企画に向けて紅器を制作中。「紅は他にはないもの、私の作品も他にはないもの。素敵な共演が出来ると嬉しいな」

■ 新商品のご案内

伊勢半本店では、10月6日より「小町紅『手毬』」期間限定柄3種(各8,925円)を発売いたします。今回の新柄は「あさのは」。魔除けの意味を持ち、粋でモダンな麻の葉文様を配したデザインは、お子様の七五三に、大切な方への贈り物に最適の一品です。



小町紅『手毬』あさのは(8,925円)

Since 1825 伊勢半本店 紅ミュージアム

●開館時間/11:00~19:00 ●休館日/毎週月曜日 (月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F

TEL&FAX: 03-5467-3735

東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehanhonten.co.jp>